０．オリエンテーション　10/2
１．「科学技術とキリスト教」系の補足１――脳神経科学　10/9
２．「科学技術とキリスト教」系の補足２――文明論としての科学技術　10/16
３．自然の宗教哲学の可能性　10/23
４．実定宗教・宗教史と宗教哲学――特殊と普遍　10/30
５．キリスト教神学と宗教哲学　11/6
６．宗教哲学はいかなる意味で哲学か――宗教哲学と方法・合理性　11/13
７．宗教研究の基礎論としての宗教哲学　11/20
８．宗教哲学と地域性１――古代地中海世界　11/27
９．宗教哲学と地域性２――キリスト教中世　12/4
10．宗教哲学と地域性３――アジアあるいは日本　12/11
11．宗教哲学と現代１――科学技術・生命・心　12/18
12．宗教哲学と現代２――解放系　12/25
13．宗教哲学と現代３――宗教的多元性　1/8
（14．宗教哲学と現代４――民主主義　1/15　月曜日授業実施）
（15．フィードバック　1/22　金曜日授業実施）

＜授業の概要・目的＞
現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。この対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。本講義では、こうしたキリスト教思想を取り巻く思想状況を念頭に置きながら、キリスト教思想の新なる展開の可能性について議論を行いたい。

そのために本講義では、キリスト教思想とその宗教哲学的基盤の探求というアプローチが試みられる。キリスト教思想の新たなる展開には、こうした根本からの議論の組み立てが要求されるからである。2018 年度後期は、これまでの講義内容を踏まえつつ、現代の宗教哲学において課題とされるべき諸問題について考える。

＜成績評価＞レポートによる。

＜受講の注意事項＞
・受講生には、講義内容を理解するために必要な復習を行うのはもちろんのこととして、各自の研究テーマとの関係づけを行うための発展的な学習が求められる。必要に応じて講義担当教員との研究相談を行うことが望ましい。
・質問は、オフィスアワー（火３・水５）を利用するか、メール（授業にて、指示）で行うこと。

＜導入・昨年度講義から＞
Ａ．２０１６年度・後期
キリスト教思想と宗教哲学（１）――「哲学と神学」の歴史的概要――

０．オリエンテーション
１．哲学と神学、あるいはキリスト教神学の起源
２．オリゲネス
３．アウグスティヌス
４．トマス・アクィナス
５．ルターとカント
６．シュライアマハーとヘーゲル
７．キルケゴールとシェリング
８．ティリッヒとハイデッガー
９．リューサーとアーレント
10．モルトマンとハーバーマス
11．神
12．人間
13．宗教と文化
14．死

Ｂ．２０１７年度・前期

キリスト教思想と宗教哲学（２）――「解放の神学」系の思想から――
０．オリエンテーション
１．「解放の神学」系とは何か
２．拡張された自然神学と社会科学
３．解放の神学と宗教社会主義論
４．フェミニスト神学
５．黒人神学
６．アジアの解放の神学
７．アフリカ神学の動向
８．政治神学の現在
９．宗教的寛容論
10．民主主義とキリスト教
11．戦争論と平和論
12．経済の神学
13．経済と環境
14．経済と政治

Ｃ．２０１７年度・後期

キリスト教思想と宗教哲学（３）――「科学技術とキリスト教」系から――
０．オリエンテーション
１．「科学技術とキリスト教」系の動向を見る
２．科学技術の神学と聖書学
３．エコロジーの神学１

４．エコロジーの神学２
５．環境・経済・政治
６．生命論の神学１
７．生命論の神学２
８．「宗教と科学」関係史１
９．「宗教と科学」関係史２
10.「宗教と科学」関係史３
11.「宗教と科学」関係論の現在
12. 原子力とキリスト教１
13. 原子力とキリスト教２
14. 文明の問いとしての科学技術

Ｄ．２０１８年度・前期

キリスト教思想と宗教哲学（４）――アジアと日本のキリスト教思想――
０．オリエンテーション
１．アジア・日本のキリスト教思想を問う
２．日本キリスト教の歴史的概観
３．明治時代のキリスト教の問題
４．植村正久
５．海老名弾正
６．内村鑑三
７．無教会キリスト教の系譜から
８．キリスト教社会主義と社会批判
９．賀川豊彦と組合的共同主義
10. 天皇制あるいは日本の宗教的伝統
11. アジアのキリスト教の諸問題――解放と土着
12. 韓国キリスト教と民衆神学
13. インドのキリスト教１
14. インドのキリスト教２

芦名定道「現代神学の冒険――新しい海図を求めて」(『福音と世界』新教出版社)
第 19 回　「科学技術の神学」系とは何か（2018.4）

「この二〇世紀に科学／技術は驚異的な発展をとげ、私たちの生活を大きく変えた。それは一方で、文明の利器として、より多く、より速く、より安く、より楽に、をきわめて短期間に実現してきた。しかし他方で、核、宇宙、バイオテクノロジー、情報通信などの先端技術のシステムは、ひとり歩きの危険性をもち、人間のコントロールを逸脱しようとしている。さらに、それらの恩恵を享受できる国々（人々）とできない国々（人々）との格差は拡大し、また科学／技術が国境を越えるなかで、地球環境問題にも大きな影響を与えようとしている。」（編集委員による「まえがき」より。『岩波講座　科学／技術と人間 1　問われる科学／技術』岩波書店、一九九九年、所収）

・・・
「科学技術の神学」は、科学技術という人間の営みに関する神学的考察を意味しているが、最後に示すように、そこに含まれる問題は多岐にわたっている。
・・・
科学技術は現在いかなる仕方で問題化しているのか、またこの問題を扱う「科学技術の神学」は「解放の神学」系とどのような関係にあるのか、そして科学技術の神学にとって聖書はどんな位置づけになるのか、という三つの問いであり、この順で説明を行うことにしよう。

科学技術の現在

科学技術をめぐって、今何が起こりつつあるかを考えるとき、二〇世紀末、一九九〇年代頃から――一九八〇年代以降における環境危機の世界的な顕在化、一九七九年のスリーマイル島原発事故、一九八六年のチェルノブイリ原発事故などを受けて――科学技術のあり方に対する批判的な反省が目立つようになってきたことは示唆的である。（＊）科学技術の発展に対する素朴な期待感とそれに伴うバラ色の未来像は、ＡＩ、脳科学、遺伝子工学をめぐる言説はやや別にして、基本的に過去のものとなったと言うべきであろう。現代世界が直面しているのは、政治経済の主導の下で進展してきた科学と技術の一体化（科学技術）が国家的巨大プロジェクトとして世界を動かしている現実であり、そこには国民国家をも傘下に入れたアントニオ・ネグリらの言う「帝国」・・・がその全貌を顕わにしつつある。こうした科学技術の動向は、近代を通じて徐々に進められてきたものであるが、二〇世紀半ばにはそれに気づいていた思想家が存在する。たとえば、一九五八年に『人間の条件』を公にしたハンナ・アーレントはその一人である。

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った。・・・重要性からいえば、もう一つの出来事、核分裂にも劣らぬこの事件は、それをめぐる不愉快な軍事的・政治的背景さえなかったら、嘘いつわりのない喜びで歓迎されたことであろう。・・・むしろ、時の勢いにまかせてすぐに現われた反応は、『地球に縛りつけられている人間がようやく地球を脱出する第一歩』という信念であった。」（ハンナ・アレント『人間の条件』ちくま学芸文庫）

アーレントが指摘するように、人類が地球上に誕生以来、現在に至るまで「地球は人間の条件の本体そのもの」であったにもかかわらず、現代科学は、「人間を自然の子供としてその仲間に結びつけている最後の絆を断ち切るために大いに努力しているのである」。ここでアーレントが見抜いているのは、宇宙開発や原子力などによる「人間の条件」の根本的な変容という事態である。二〇世紀末の転換期における科学技術をめぐる問い、そして現代の問いは、このアーレントの議論の延長線上にあると言えよう。それは、環境危機、情報化、生命科学などに関わる科学技術の倫理性の問いであり、神学的問いである。つまり、現代の科学技術において問われているのは、まさに人間存在の条件であり、これは、「第一級の政治的問題であり、したがって職業的科学者や職業的政治屋の決定に委ねることはできない」（同書）。・・・

・・・アーレントの議論から半世紀以上を経過した現代において、「科学技術の神学」を問う場合に留意すべきものとして、ベルナール・スティグレールの「技術の哲学」を参照することにしたい。（＊＊）スティグレールは、独自の「技術の哲学」（「技術と時間」シリーズの第三巻目まで、法政大学出版局より邦訳出版）を展開中のフランスの哲学者であるが、古代ギリシャのエピメテウス神話に基づいて人間（＝「死すべきものたち」）を本質的特質が「欠如」した存在者と捉えた上で――ゲーレンの言う欠陥生物――、技術とは人間がその欠如にもかかわらず生存するために必要な人工物（人工器官）であると説明する。したがって、技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間は技術によって人間として構成された技術的存在と考えられねばならない。特に、スティグレールが注目するのは、記憶を世代から世代へと伝えるための技術であり、図形や文字は、先行する世代の記憶を外在化し、それを次の世代が内在化することを可能にする技術にほかならない。現代の科学技術は、視覚と聴覚のアナログ的総合の技術（写真と蓄音機）を経て、デジタル化へと到達した。それは、記憶技術が産業の管理下に置かれるというプロセスのいわば完成であり、現代は、「記憶の産業化プロセスの時代」なのである。スティグレールは、この記憶と意識が産業化と商品化のプロセスに全面的に組み込まれる時代を、「精神の歴史上の一大危機」と捉えている。

・・・人類史において、科学と技術とが本来人間の活動の別の系譜に属してきた点に関わる場合には、「科学技術」と区別して「科学・技術」と表現することにする。

科学技術の神学と「解放の神学」系

科学技術はすぐれて現代的な問題であり、現代を論じることは科学技術を抜きには不可能である。それは、・・・「解放の神学」系との関係においても確認することができる。「解放の神学」系における現代神学の動向は、人間の救いが具体的な社会的文脈における解放と不可分であるとの認識に基づいている。この「具体的な」という点を突き詰めて考えるとき、それには現代の科学技術との根深い関わりが潜んでいることがわかる。たとえば、「解放の神学」系の代表的な神学者と言えるモルトマンが、実は、若い頃から「科学技術の神学」系の神学者でもあったことは、比較的新しい二つの邦訳書（いずれも新教出版社より刊行）、『科学と知恵――自然科学と神学の対話』（二〇〇七年）、『希望の倫理』（二〇一六年）が示す通りである。科学技術は現代の不安はもちろん希望にも深く関与していると言わねばならない。このことは、環境の神学が「解放の神学」系と「科学技術の神学」系の両方に属していることからも了解できるだろう・・・。現代の科学技術は、政治・経済の問題であり、政治・経済の状況は科学技術と分かちがたく結び付いている。したがって、現代神学の海図を描く作業は、いわば便宜上、「解放の神学」系と「科学技術の神学」系に分けて進められるものの、二つの問題系は、相互に結び付き、絡み合っていることにつねに留意しなければならない。

この二つの問題系の絡み合いに関連して、先に紹介したスティグレールを再度取り上げて見たい。スティグレールが、現代の科学技術を視覚と聴覚の総合技術（写真と蓄音機）のデジタル化として捉えていることはすでに指摘した通りであるが、現代技術は、視聴者である人間の意識と文化産業が提供する視聴覚メディアとをシンクロさせ、その結果、本来は通約不可能でユニークなはずの「私」や「われわれ」（たとえば民族）の固有性は消

滅し、すべてが同一の「みんな」（＝「完全に付和雷同する群れ社会」）に解消されることになる。「私」も「われわれ」も同一の視聴覚メディアを消費する「消費者」として同化されるのである。このシンクロが可能になったのは、人間の意識の流れと視聴メディアとがいずれも「イメージの流れ」であるという点で同質だからであり、この同質性は、デジタル化された視聴覚総合技術によって極限まで高められる。今や、本物とコピーとは見分けがつかないまでになっており、「人間のほとんどあらゆる経験が、感性・情動的かつ認知・情報的なコントロールに服従することになった」。こうして、「科学技術の神学」系のテーマである視聴覚の総合技術のデジタル化は、「私」と「われわれ」の産業的なコントロール（「みんな」化）という「解放の神学」系のテーマと接続することになる。スティグレールによれば、この産業的なコントロール社会は、現代の資本主義社会が、従来の資本主義（産業資本主義＋金融資本主義）から区別され文化資本主義あるいは認知資本主義と呼ばれる段階にいたったことに基づいており、現代はハイパーインダストリアル時代と言わねばならない。認知資本主義やハイパーインダストリアル時代といった議論――現代は情報的文化的な内容を商品として生産する非物質的労働（＝認知労働）によって特徴づけられ、デジタル化された情報技術を介して人間の生全体（労働も消費もすべて）に資本の支配がおよぶ――の評価については今後批判的な吟味が必要となるが、ここでは、「科学技術の科学」系が「解放の神学」系と絡み合っている点に現代神学の問題状況があることを確認しておきたい。

科学技術と聖書

「科学技術の神学」系を論じるには、次々に登場する科学技術とその影響について神学的な分析を行うことが求められるが、そのためには、科学・技術をキリスト教的神学的にいかに捉えるかが問題になる。本連載では、「解放の神学」系を論じる際に、聖書の社会教説から社会科学という基本線を提示した。つまり、歴史的な諸キリスト教が包括する多岐にわたる立場と立論を視野に入れて「キリスト教的」に議論するために、聖書テクストから出発するという方針であった。同様に、「科学技術の神学」系を論じる前提となる、「キリスト教的」な科学・技術理解を明確化するためにも、聖書（創世物語）から科学・技術についての基本的見解を取り出すことを試みたい。（＊＊＊）取り上げられるのは、次の箇所である。

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。」（創世記一章二七節）
「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」（創世記二章七節）
「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。」（創世記三章六節）

これらの三つの箇所（＋それぞれの前後の文脈）から人間理解に関わるキーワードとして、①神の像／支配（創世記一章）、②土の塵／耕す／命名（創世記二章）、③堕罪（創世

記三章）が取り出される。まず、①と②の二つのキーワードは、人間存在の有限性とまとめることができる――時間的な始まりは終わりを含意する――。その内、①は伝統的に「創造の善性」と解されてきたことからわかるように、人間存在の善性を意味するものと解釈することができ、②はその善性において遂行される人間の行為と理解できるだろう。「科学技術の神学」系という観点から注目すべきは、土を「耕す」（創世記二章一五節）には「技術」へと現実化する可能性が、「命名」（創世記二章一九節）には「科学」に発展する可能性が見出されるという点である。世界の事象に名を与え、世界の事象を変化させる行為は、まさに科学・技術の原型というべき営みであり、ここから、聖書の人間理解に従えば、科学・技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在の本質に属するものであるという論点が帰結する。人間は本来、耕す存在者、つまり「農民」であり、同時に命名する存在者、つまり「科学者」なのである。そして、これらの人間の営みは、神の被造物が、神の目から見て、すべて善なるものであるということ――「神はお造りなったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」（創世記一章三一節）――のうちに置かれている。

しかし、①と②に対して、③は善なる本質の歪曲＝疎外を意味する。キリスト教思想には、人間存在を本質存在と実存存在という二つの規定によって論じる伝統が存在するが、これは以上の聖書の人間理解の哲学的解釈と考えてよいだろう。この聖書と哲学が共有する伝統的な人間理解は、現代神学においても受け継がれている。たとえばティリッヒは、この有限性と疎外（本質と実存）の二重性を、人間的生（＝人間の現実存在）の両義性と解釈する。人間の行為を善と悪のいずれか一方にのみ還元することは不可能であり、本質と実存の混合体としての人間の生の現実においては、善なる面と悪なる面とは不可分に結びついている。人間存在の両義性からは、完全な善人も完全な悪人も存在しないという人間の実相が見えてくる。

この両義性は人間の営みである科学技術にも妥当する。これが本連載で科学・技術を論じる際の基本的な視点にほかならない。この両義性を前提にするとき、次のような問いが生じてくる。原子爆弾は悪、原子力の平和利用である原発は善という議論は可能か。ｉＰＳ細胞などの遺伝子工学は、善と悪のどこに位置づけられるべきなのか。これらの問いを念頭におきつつ、本連載では、科学技術について具体的な考察が行われるが、聖書に描かれる科学・技術の両義性について、次の点を指摘しておきたい。福島の原発事故についてはこれまで少なからぬ神学的な議論がなされてきたが、栗林輝夫は「キリスト教は原発をどう考えるか――神学の視点から」（西原廉太、大宮有博編『栗林輝夫セレクション 1 日本で神学する』新教出版社、二〇一七年、所収）で、「神学的に言えば、技術とは人類が堕落した後に過酷な環境を生き抜くため神から与えられた力」とした上で、聖書には二つの技術が描かれていることを論じている。一方に位置するのは「バベルの塔」であり、他方に位置するのは「ノアの箱舟」である。このように考えるとき、人間が生み出し使用してきたさまざまな技術はこの両極の間に位置する両義的なものと言うべきなのではないだろうか。だからこそ人間に求められるのは、栗林が述べるように、生命のために「技術を見極める知恵」なのである。

・・・

（＊）この一九九〇年代の問題意識は、次のシリーズと著作に現れている。これらがすべて同年の刊行であることは偶然の一致だろうか。
『岩波講座　科学／技術と人間』（全十一巻＋別巻）岩波書店、一九九九年。
加藤尚武・松山壽一編『科学技術のゆくえ』ミネルヴァ書房、一九九九年。
富坂キリスト教センター編『科学技術とキリスト教』新教出版社、一九九九年。
（＊＊）今回の連載で紹介する、ベルナール・スティグレールの議論については、主に『象徴の貧困――１｜ハイパーインダストリアル時代』、『愛するということ――「自分」を、そして「われわれ」を』、『偶有からの哲学――技術と記憶と意識の話』（いずれも新評論から出版）が参照された。なお、スティグレールの議論の全体を把握するには『偶有からの哲学』が便利であろう。
（＊＊＊）わたしは以前にこれと同様の議論を次の論文で行った。芦名定道「科学技術の神学にむけて――現代キリスト教思想の文脈より」（日本宗教学会『宗教研究』第八七巻、三七七・二、 二〇一三年、三一―五三頁）。